Japan Evangelical Lutheran Association

JELA NEWS

ジェラ ニュース　第30号　2013年4月15日発行　発行責任者 森川 博己

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 一般社団法人日本福音ルーテル社団

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア（祈りのたて琴）研修講座／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちはわたしが飢えているときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言っておく。私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」　マタイによる福音書　25章35節～36節40節

希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい

今年の冬もインド・ワークキャンプを行いました。参加者10名とスタッフ2名の合計12名が2月12日から22日までインドで奉仕しました。上に記したのはキャンプのテーマ聖句・ローマの信徒への手紙12章12節です。キャンプ参加者の声は2ページ以下をご覧ください。

[この号にはこんな記事が]

インド・ワークキャンプ参加者報告　……2～3　義足の製作から贈呈まで……　4～5　JELAの奨学金でブラジルの農業指導者へ（ジョエルマ・ゴメス・デ・ケイロス）　……6　JELAの奨学金で夢をつなぐ（今村春香）……7　リラ・プレカリアの体験を通して（井上るみ子）　……8　新しい宣教師の紹介　……9　JELAワークキャンプ・アンケート調査結果……9　日本に定住する難民の支援（鶴木由美子）　……10　チャリティーコンサートのお知らせ……11　理事長あいさつ・支援者一覧・編集余話　……12

「Pray for・・・」インドワークキャンプ参加者報告

希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」ローマの信徒への手紙12章12節

第７回インド・ワークキャンプを２月 12 日～ 22 日の日程で実施しました。作業は、インドのジャムケット村でキリスト教精神により活動している Comprehensive Rural Health Project（=CRHP）での義足作りの手伝いと古新聞と木屑を水に混ぜたものを圧縮して着火剤を作りました。また病院や村、幼稚園を訪問し、10代の少女たちとふれ合い、色々な境遇の女性から話を聞きました。そして毎晩３時間の一日の振り返りで「祈ることの大切さ」を実感したキャンプとなりました。参加者のレポートを一部抜粋し掲載いたします。(全文は JELA のホームページでご覧いただけます。http://www.jela.or.jp)

下条のゆり
(日本聖公会浅草聖ヨハネ教会)

今まで想像することすら困難だったインドの生活を目の当たりにし、ことに CRHP でまるで家族のように受け入れられることによって、私は刺激され、自分が変わっていくのを感じました。何故なら、人と出会いその人を想い、考えを巡らせるだけで世界の見え方が変わるからです。自分の感性が豊かになるのが分かるからです。

高橋奏　(JELC 東京教会)

今回のキャンプで祈りの強さを知り、祈ることが大好きになりました。誰かのために祈る、誰かが私のために祈ってくれる、一人で祈る、みんなと一緒に祈る、祈りの中で辛いこと、嬉しいこと、たくさんのことを分かち合った素敵な時間は、忘れることができません。

市川秀子 (JELC シオン教会柳井チャペル)

インドの女性が、生い立ちからはじまり、「困ったことを訴え、人に頼り，CRHP で訓練を受け、助け合い、祈り合い、今があるのです。」と話してくれたことは私には欠けていることだと示されました。私は困った時、なるべく人の手を煩わさないよう，神様には祈るけど、友達に「祈ってね。」とは言ってきませんでした。でもそれは、神様の働きを小さくしてしまうものだとわかりました。

沼部真奈　(JELC 大岡山教会)

今まで自分のための祈りが多かった私が相手を通して神様と対話できることに気づかされました。施設では相手を愛することにより神様を愛する「愛」、来る人がきっと喜んでこの先、生きていけるような「願い」、神様と共に生きていくことへの「希望」。一人ひとりが生きていく上でとても大切にしているのが言葉にしなくても伝わってきました。そして、私も人のため、神様のために喜んで行動できる人間になりたくなりました。

神崎いずみ　(JELC 名古屋めぐみ教会)

スラム街に生まれたから不幸、インドで女に生まれたから不幸、病気や障害を持っているから不幸、だなんて所詮私たちの一方的なものさしであって、何をもって恵まれない環境、体とするかなんて、私たちに決められることではないのだと思います。私たちから見て“かわいそうな人たち”というのは、実は私たちよりずっとずっと神様に近くて、恵まれた存在なのではないか、人間には計り知ることのできない神様のご計画がそこにあるのではないか、そんなことを考えました。だからこそ、そういった人たちに“奉仕”という形で関わることによって、私たちは逆にその人たちから多くのものを与えられるのだと思います。

石川実可子　(JELC 名古屋めぐみ教会)

義足作りの工程に、太ももやふくらはぎの形に整えられた鉄筒を金槌でたたき、義足を強固にする作業があります。まんべんなく打ち終えた私は作業スタッフに OK をもらいに行こうとして、今まで自分が叩いていた、太ももの形をした鉄筒をわきに抱えました。その時私は、その鉄の塊から何とも言えないぬくもりを感じました。重く冷たいはずの義足が、自分の体の一部のように思えてしまい、このまま抱き続けていたいとさえ思いました。自分の体の一部が彼らの体の一部になる、そう感じた私は、「義足の人も、自分の足で立つ人も何も変わらない、神様によって作られた同じ人間なんだ」ということに気づかされました。

田島千恵子　(東京羽田キリスト教会)

ディボーションで「ジャムケットで暮らす人たちがあなたに期待していることは何だと思いますか」という問いかけを何度か考えました。人から何かを伝えられるというのはとても重たいこと、大切なことなのだということを何度もキャンプ中に感じました。そのとき私はこうしてインドで知らされたこと（よかったことも、かなしいことも、そして私のことも）を今度は私が誰かに伝えられたら、伝えることで一緒に何かを思えるようになったらと思いました。

渡理聖以(JELC 八王子教会)

CRHP では女性の自立支援のため、村々から基礎教育を受けるために集められた少女たちが 3 ケ月間学ぶ。柔道も習得する。

13 歳から 18 歳までの 20 名の少女たちに指編みシュシュの作り方を教えました。少女たちは、私たちの周りに集まり目を輝かせて、笑みいっぱいに食い入るように私の指もとを見つめていました。私はその様子に、「神さま、この奉仕を下さりありがとう」と心の中で叫んだ。

富井杏奈(JELC 市ヶ谷教会)

義足の贈呈式の時に、女性が新しい義足を身に着け、歩いている姿を見て私は嬉しくて泣きながら彼女のもとへ行くと、私の涙を拭いて「泣かないで。私にとっては新しい脚ができてとても嬉しいことなのだから。」と言ってくれました。義足を受け取って帰っていく人の中には、まるで本物の脚のように颯爽と歩いていく人もいました。彼女や他の義足を受け取った皆が、これからより生活がしやすくなるのだなと感じ、私は本当に喜びでいっぱいになりました。

堀川有理子(JELC 田園調布教会)

私たちは非常に大きな困難を乗り越えたたくましい女性たちに出会う機会を与えられました。私は彼女たちから、女性として強く生きるための勇気をもらいました。また神様はどんな時も側にいて下さることを教わりました。私の想像をはるかに超えた困難を乗り越え、そして今でも困難の中にある彼女たちの笑顔の中に、彼女たちの祈りと神様の愛が見えた気がしました。

義足のできるまで　❶採寸
膝上、膝下、太もも等、義足の接合部位に応じて太さや全体の長さを、一人ひとり正確に採寸します。

❷図面ひき
採寸したサイズをアルミ板に写し、正確な図面を描いていきます。

❸アルミ切断
描かれたラインに合わせてアルミ板を金切鋏で切っていきます。

義足の製作から贈呈まで

◆インド・ワークキャンプの始まり◆

インドのジャムケッドという田舎の村に、ラージ・アロレ先生というクリスチャン医師がいました。先生は、アメリカの有名大学でも教えていたキリスト教会（聖公会）の信徒ですが超教派的な見識を持ち、大学での教授職を辞退して、インドに帰り、最も貧しい地域で医療の仕事を始めました。

1970年に始めた働きが広がり、今では病院をはじめ、学校、幼稚園、女性の職業訓練、農場、HIV/AIDS患者や夫の暴力に苦しむ女性を守るためのシェルター施設、そして病気や事故で足を失った人たちに義足を作り提供する事業など、CRHP（Comprehensive Rural Health Project＝総合的地域健康プロジェクト）という総合的な取り組みになりました。

南米、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア等からも、地域医療や地域開発支援事業のケース・スタディとして、大学生のグループがここにに実習に訪れています。またインドの地方政府も保険福祉事業のモデルとして注目しています。

インドでは怪我や感染症による脚部の傷害には、医療体制や経済的な理由で切断治療するケースが多く、その上障害への偏見から差別される事も多いために、義足の需要が高いといわれています。しかし貧しい農村では市販の義足を買う余

贈呈式で順番を待つ人々

皮膚を保護するために義足をはめる
足に布を巻く

接合を確かめながら調整する

❹筒成形
筒状のアルミ板を太い鉄棒にさし、ハンマーで叩きながら形を整え、強度を上げていきます。

❺ボンド塗り
ペンキとボンドを混ぜた液体を数回塗る作業

❻仕上げ
義足を足に固定させるためのバンドを取り付けて完成

裕もなく、座臥の生活習慣に合わないために、経済的な負担がなく、自分の体にあった義足を望む人が多くいます。

JELAは長年にわたりCRHPを経済的に支えてきましたが、2005年2月に、JELAと日本福音ルーテル教会(JELC)の共同プログラムの一つとして、この義足作りを中心にしたインド・ワークキャンプの1回目を開催し、現在はJELA主催で実施しています。

ワークキャンプでは、滞在期間中に80～100本の義足を作ります。この活動を通して参加者の信仰や視野が広がることをJELAは願っています。

バンドで固定する
おしゃれな女性は義足にマニキュアをしたアンクレットで飾ったりしています

初めて両足で立った!!

国際青年交流奨学金

喜びの声：JELA の奨学金でブラジルの女性農村指導者へ

イエス・キリストの愛に基づき、農村指導者の養成と訓練を行っているアジア学院(=ARI、栃木県那須塩原市)に JELA の奨学金を受けて学んだ一人のブラジル人女性がいます。

彼女の名前は、ジョエルマ・ゴメス・デ・ケイロスさん。2012 年 3 月に来日し、2012 年 12 月までブラジルの農村指導者となるべく有機農業、畜産などを学びました。ジョエルマさんから JELA への感謝のメッセージが届きましたのでご紹介いたします。

アジア学院卒業式　中川理事長と

感謝の言葉

「アジア学院で学べる機会を与えていただき私は幸せです。神さまに感謝しています。JELA の財政支援なくして、この研修を受けることはできませんでした。本当にありがとうございました。東京に行った際には、いくつかの教会を訪問しました。この体験によって私は霊的にも成長しました。私は多くを学び、祖国の地域社会と組織をつなげていける存在になりたいです。」

ブラジルの農民の現状

MST のシンボルマーク

ジョエルマさんを ARI に送り出したのは、「土地なし農民運動（＝MST＝Movimento dos Trabalhadores Rurais Sem Terra）」というラテンアメリカ最大の社会運動団体です。この団体はカトリック教会の支援で始まり、南米で農地解放を進めています。

ブラジルでは農民全体の 3% 未満の大農場主が、農地全体の 3 分の 2 の土地を所有し、その 60% が耕作されないで放置されています。約 2500 万人の小作農は、わずかな土地を耕して貧しい生活を送っているのが現状です。

ただし憲法条文は、「全ての土地は生産活動に使用されなければならない」とあり、これを根拠に MST では農地として使用されていない土地を占拠し、土地を持っていない人々に分配するという活動を進めています。このようなやり方は地主からは、「不法侵入」として批判され、抗争も続いており、この 10 年間で 1000 人以上の死者が出ているといいます。

MST の活動は単に土地再生を目指すだけでなく、土地再生をコミュニティの再生手段として、コミュニティの組織化、構成員間の協力、そして環境問題を重視して有機農法の導入を進めています。最近では「遺伝子組み換え作物栽培禁止」への行動も注目されています。

帰国後の活動

ジョエルマさんはブラジルに帰国後、早速 MST の会議に出席し、ARI での生活や地域活動、農場と農民の関係など組織的なことについても説明しました。また、ブラジル南部パラナ州の西部地域で、有機牛乳の生産を開始しました。 MST に参加するほとんどの集落は、貧しい家庭や社会から除外され人々です。彼らは野菜や穀物の生産で生計を立てていますが、家畜を飼うことで収入の安定化を図ることができるのです。中でも乳牛は有望で、一日の平均乳量は 45 リットルになることから、農家の収入の一翼を担うと期待されています。この乳牛プロジェクトでは、生産者が家畜についての知識を深め、健全で持続可能に牛乳を生産することを目的としています。有機牛乳を生産するために、土壌保全と芝生の成長支援技術とワークショップを行い、土壌分析のための情報収集活動を開始しました。ジョエルマさんの進める土壌保全型の有機農法は、植物、野菜、穀物、果物を栽培し、家畜(豚、鶏、牛)を飼うことで土壌を回復するという ARI が提唱するものです。このような有機農法を学ぶことができるように、MST では小グループのミーティングを開始しました。農民の多くは、農園・農場の回転周期を尊重する循環型の農法に興味を示しています。

ARI での田植え実習

また、ジョエルマさんは教会や MST が支援するパン工房での実用的な作業に貢献しています。パン工房では、パンの他、ウェハースやスパゲッティが作られ、働く人々の収入源となります。これらの商品は MST の販路を使って販売されます。パン工房では現在週に 500 キロの製品を製造しています。

パンの製造販売

畑の土壌調査

抱負

「私、ジョエルマは ARI の農村指導者養成プログラムで得た精神で、新しい女性の農村指導者としてリーダーシップを発揮していきます。」

JELA と ARI では、ジョエルマさんが日本で学んだことを最大限に生かして MST で活動することを期待しています。

JELA を支えてくださる皆様のご支援により、アジア学院の学生の方に毎年奨学金をお出ししています。発展途上国において農村指導者が育つことは地域社会の活性化に不可欠な尊い働きです。引き続きご支援のほどよろしくお願いいたします。

国際青年交流奨学金

JELA では 2012 年 4 月からベトナム国籍の今村春香（本名 VU THUY DIEM TRANG）さんへ大学で学ぶための奨学金を支給しています。春香さんの両親は戦火を逃れるために日本へやって来た難民です。日本で生まれ育った春香さんには大きな夢があります。バイタリティーあふれる彼女に日本での生活、将来の夢について原稿を書いていただきました。

私の思い

今村 春香
群馬県立女子大学
国際コミュニケーション学部 1 年

1. 両親の生い立ち

私は日本で生まれました。両親は難民として日本にきました。ベトナムでは当時ベトナム戦争が起こっていて、両親はまだ幼かった私の兄を連れ、どこに行くかもわからない船に乗り込みました。自分たちの命と兄の命を守るために、必死の思いでした。日本に無事にたどり着いたものの、日本語が分からず大変な日々だったと聞きました。両親は生きるために毎日働き、私たちを育ててくれました。

2. 小学校・中学校時代の私

両親が共働きだったために、身の回りのことはなるべく自分でしていました。友達は両親にいろいろな所に連れて行ってもらっていたことを羨ましく思ったことが何度もありました。また、私の母は、日本に来てからずっと働いていたために日本語の読み書きができず、学校から持ち帰ったプリントの保護者のサインを私は自分で書いていました。まだ幼い私の字は下手で、学校に提出するときに嫌だったことを今でも覚えています。この頃から、しっかり勉強して、将来は両親に楽をさせてあげたいと思うようになりました。日本とベトナムという二つの国に触れながら育ったために、国際社会や異文化に興味があり、自分が架け橋になる、とずっと思っていました。これが私の夢や希望の原点です。もともとベトナム語と日本語の２ヶ国語を話すことができたので、あとは英語だと思い英語習得の意欲は幼い頃からありました。

3. 高校時代の私

大学まで行き、できれば留学して、現地の人に通じるような英語を習得したいと考えていました。しかし大学に進学するには経済的に厳しいと思っていたので卒業後に就職に有利な商業高校に進学しました。よい職に付けるよう、行きたい大学に行けるよう、たくさんの資格を取り、成績も上位をキープしていました。進路を決めるときに、幼いときからの夢を私は諦めることができずに大学へ進学することを決めました。商業高校から英語系の大学への進学は珍しく、とても努力した結果、合格を掴み取ることができました。しかし、進学するにはやはり経済的に厳しいので諦めざるを得ない状況になりました。そんなときに、日本福音ルーテル社団に出会い、学費を支援していただけることになったので、私は無事に大学に進学することができました。

4. 現在の私

大学に進学できた今、やりたかった英語習得に力を注いでいます。毎日ネイティブスピーカーの先生たちに囲まれ、日本にいながら生きた英語が学べています。自ら進んで先生の研究室に行き、会話をしています。夏期講習などにも積極的に参加し、長期の休みでも先生と会話をできる場を設けるなど、もらったチャンスを最大限に生かしています。先生との会話は英語力につながるのはもちろん、文化の違いも分かり、英語力だけではなく、考え方の面でも視野が広がっています。TOEIC の点数も入学した頃からぐんぐん伸び、着々と世界に飛び出す準備が進んでいます。いつの日か日本・ベトナム・アメリカなど国と国をつなげられるような仕事をするのが私の夢です。また、私が日本福音ルーテル社団に支援していただいたように私もいつか支援する側になりたいです。私がこうやって夢を追いかけることができるのも日本福音ルーテル社団の支援があるからです。もしなければ、私は今頃働いていて英語に全く触れることもなく、未来への可能性は狭まっていたと思います。今の私があるのは日本福音ルーテル社団のおかげです。とても感謝しています。

写真：手前右　今村さん

リラ・プレラリア　「祈りのたて琴」

2012 年末、JELA に一本の電話がありました。受話器の向こうで女性はリラ・プレカリア（祈りのたて琴）をお願いしたいと切実に訴えていました。電話の主は、今回原稿を書いていただいた井上るみ子さんです。彼女と JELA との出会いは、ホームレスを支援する NPO「きぼうのいえ」での活動を通してです。JELA は、彼女を通して病床の患者様へハープと歌の祈りを届ける機会を与えていただいています。井上さんにリラ・プレカリアの活動を通して感じられたことや思ったことを書いていただきました。

リラ・プレカリア（祈りのたて琴）の体験を通して

「こどものちから」準備室代表
井上るみ子

「どうしてもリラ・プレカリアを聞かせてあげたいお子さんがいます。お願いできないでしょうか？」突然の私の電話に日本福音ルーテル社団は、依頼の理由や状況を順序立てて話せないでいる私を包み込むように優しく、そして迅速に対応してくださいました。

我が子（三男）が小児がんを発病したのは 15 年前。中学 1 年生の時でした。三男も同様ですが小児がんを発病する子は、告知宣告を受けるまで病気知らずの元気な子がほとんどだと知ったのは、がん専門病院に関わるようになってからでした。

がん専門病院には親の会がありました。病児同士・家族内・家族間のつながりを目的とする数々のイベントは、病児のみならず母親である私の居場所を作ってくれました。「僕がいなくなっても、病気の子や家族の話を聞いてホッとさせてあげてね。その時は僕が手伝うから。」息子との約束を守るために、病児や家族と関わるうちに病気と向き合うには様々なサポートが必要であることに気づきました。

今日の医療の場では、病気のことが理解できる年齢になれば病児に告知し、治療内容を説明し、治療の選択をさせることがあります。否応なしに「生きる意味」や学業、治療、年齢相応のやりたいこと、将来のこと等について考えなければなりません。同様に家族も心身共に沢山の問題を抱えることになり、こうした一人では行き詰まってしまう問題に、社会の力を借りて様々なサポートをするために、私達は「こどものちから」という団体を立ち上げました。

「こどものちから」では、病児や家族が安心して相談ができ、学習面を含むサポート、兄妹が取り残されないような関わり、病児を亡くしてしまった家族の深い悲しみへのグリーフケア、介護者のレスパイトケア等ができるように準備を進めています。

この 2 ヶ月ほどの間に二人の病児のところへ、リラ・プレカリアの訪問をお願いしました。一人は余命宣告を受け自宅療養をしている 10 代後半の女性でした。静かに聞き入り、ゆっくりと夢心地になり、穏やかな表情を浮かべる彼女を見て私自身落ち着きました。翌朝、私は不思議な夢を見ました。息子と並んで座っていると「これから一緒にやっていきましょう。」と言う男性の声がして、思わず二人で手を取って喜んだのです。何を一緒にやっていくのか言葉には入っていませんでしたが、私の心には、リラ・プレカリアのことが頭をよぎりました。久しぶりに息子と手を取って喜び、幸せな気持ちになりました。リラ・プレカリアは聞いている時だけではなく、そのセッションの後も影響しているのではないかと思います。

二人目は、昏睡状態にある 20 代前半の女性でした。肩が上がるほど苦しそうな息づかいは、リラ・プレカリアを聞いている間に回数が減り、表情も穏やかになりました。彼女のお父さんは「在宅療養で病児の状態をピリピリしながら見守り、家事も手につかないような張り詰めた時間を過ごしていた。娘と共に落ち着いた、ゆったりとした時間が過ごせて、とても良かった。同じような状態のご家族がいたら是非勧めて欲しい。」と言われました。その時、私はリラ・プレカリアには、張り詰めた心にゆとりと癒しをもたらす大きな力があると強く感じました。

写真：修了生の東京老人ホームでの奉仕活動

ようこそ（待ちに待った！）新しい宣教師のみなさん！

待ちに待ったELCA（＝Evangelical Lutheran Church in America）からの長期宣教師２名と短期宣教師３名が2012年11月に来日しました。当初は9月下旬に来日予定でしたが、入国管理制度の改定により、ビサ取得に時間がかかってしまい到着が遅れてしまいました。JELAは、12月中旬までの期間、ジェラ・ミッションセンター（東京・恵比寿）にて5人の語学研修のサポートを行いました。

長期宣教師のロス夫妻、夫のエリック牧師は11月より東京教会に赴任し、英語礼拝を担当。妻のターナ宣教師は主に本郷学生センターで英会話の授業等を担当しています。

キャロリン・キーナンさん（ネブラスカ州出身）は、初来日（初海外）ではあるものの中学生の頃から海外に興味を持っていました。戦後日本での叔父の経験や、所属教会の元牧師がリーランド・グライス元宣教師（1980年～1985年）であった事から、本人もいつかは日本に行ってみたいと思っており、来日できた事に感謝しています。

モーガン・ディクソンさん（ジョージア州出身）は、大学時代に日本（滋賀県）をはじめ、タイ、中国とベトナムなどで5か月間留学したのち、ノルウェーでも5か月間留学。ノルウェーでは、地元の劇団でインターンシップを経験するなど、様々な異文化を経験。再来日を楽しみにしていたと同時に、日本をさらに深く知る事を期待しています。

ローラ・フェントレスさん（カリフォルニア出身）の趣味は、ピアノ、合唱、アコーディオンなどで音楽好き。高校時代に日本へ短期留学して以来、日本語と日本の文化に興味を持ち、大学では、日本文化を中心にアジア研究を専攻しました。そのため今回来日する際には日本語の作文を書けるまで語学が上達しています。

12月末で、東京での研修を終えた短期宣教師3名は、1月10日から熊本に転居し、3月末まで引き続き研修を受け、4月からはルーテル学院中学・高等学校、および九州学院に派遣されます。

写真　左から：エリック・ロス、ターナ・ロス、キャロリン・キーナン、モーガン・ディクソン、ローラ・フェントレス

ワークキャンプ参加者へのフォローUPアンケートを実施。参加者の35%が受洗（堅信礼）とキャンプの関係を認める。

JELA事務局では、過去にJELA主催のワークキャンプにご参加いただいた、120人を対象に、教会や社会貢献など参加者の現状を把握するためのフォローUPアンケートを実施しました。39人の方からご回答をいただきましたので、その結果をお知らせします。

結果概要

■回答率

回答数は39件、回収率35％。

■教会とのかかわり

！キャンプ後に教会に通うようになり洗礼・堅信礼を受けた　9人

”キャンプ以前から教会に通っており、洗礼・堅信礼を受けている　17人

＄まだ洗礼・堅信礼を受けていない／教会との関わりはない　13人

上記！”の方への「洗礼・堅信礼」を受けたこととJELAのキャンプに関係があるかと問いに、26人中9人35%が関係があると認めています。

■JELAへの印象

39人中33人が「非常に良い・良い」と回答。「普通」が5人、「無回答」が1人。

■ボランティア活動について

現在ボランティアをしている人が8人。

■JELAへのボランティア協力

39人のうち首都圏（JELAに通える範囲内）に在住の方15人を対象に、JELAが行うプログラムやボランティア活動に興味があるかどうかを質問、興味があると答えたのは13人でした。どのようなプログラム・ボランティアに興味があるかでは、「難民児童への学習支援」ついて13人中8人、自らの経験を生かせる「各キャンプへの準備協力」も6人が興味を示しています。今後、このような方々に積極的にJELAの活動にかかわっていただく機会を設けていきたいと考えています。

※アンケート概要

調査期：2013年1月15日～2月13日

目的：ワークキャンプにご参加いただいた方の生の声を直接聞くこと、教会とのかかわり、ボランティア状況を把握し、今後JELAのサービスの向上に資するため。

調査方法：郵送（返信用封筒同封）

難民支援

JELA の難民支援活動は四半世紀の歴史を持ち、難民申請者用住居（ジェラハウス）の提供や大学等で学ぶ方への奨学金提供などを行ってきました。JELA の役員・職員が日本の難民保護の現状を知り、さらに充実した支援活動を展開するために昨年、難民支援協会の方々をお招きして研修会を持ちました。その時に難民の子どもたちの教育・保育等について情熱的に語ってくださったのが、以下の記事を執筆してくださった鶴木さんです。難民の子どもたちへの教育奉仕に関心をお持ちの皆さんへの招きとしてお読みください。活動に興味を持たれた方、ご質問のある方は、JELA 事務局・奈良部までお気軽にお問い合わせください。

＜日本に定住する難民の支援＞

認定 NPO 法人難民支援協会
定住支援部　チームリーダー
鶴木由美子

認定 NPO 法人難民支援協会（Japan Association for Refugees＝JAR）は 1999 年の設立以来、日本に逃れてきた難民が、日本で安心した生活を送れるように支援してまいりました。「食べたり、寝たり、働いたり」という人として当たり前の生活を難民一人ひとりが送れるような支援をする一方で、難民が日本社会の一員として自立した生活を中長期的に送るための支援として 2011 年 7 月に定住支援部を発足させました。定住支援部では現在、日本に定住する難民の多様なニーズに応えるために、日本語教育や児童教育、新在留管理制度の情報提供、就労相談にいたるまで多岐に渡る支援を行っています。

児童教室の遠足で水族館へ

たとえば、2012 年 7 月に新しい在留管理制度が施行されたことを皆さまはご存知でしょうか。新しい在留管理制度とは、法務大臣が日本国内に在留資格をもって中長期間在留する外国人の状況を継続的に把握する制度です。この制度の対象者には、氏名や在留資格、在留期間などが記載され、顔写真入りの在留カードが交付されます。また、在留期間の上限をこれまでの 3 年から最長 5 年とすることや、出国の日から 1 年以内に再入国する場合の再入国許可手続を原則不要とする制度の導入など適法に在留する外国人の利便性を向上させる措置が可能になりました。新しい在留管理制度の導入に伴い外国人登録制度は廃止されることになります。

難民コミュニティからは新しい制度に対する不安や質問が JAR へ多く届けられました。これを受け、関東近郊にある難民コミュニティを回り、制度の説明会を開催しました。情報不足のために様々な噂が流れており、参加した難民からは「正しい知識を得ることで不安が和らいだ」という声も聞かれました。

日本語教育サポートの分野では、社会から隔離されがちな難民女性を対象とした日本語教室や、就労現場で必要な日本語能力を身につけるための日本語教室などを行っています。就労現場で日本語を少しずつ習得するなど日本社会とのつながりが比較的存在する難民の男性に比べ、難民の女性は就労や外出の機会も限られ社会とのつながりが薄いことから、日本語習得が進んでいない者が多く見受けられます。JAR では問題解決のため、難民女性を対象とした日本語教室の開催や、他の NGO と協力して日本語教室の紹介などを行っています。現在 JAR が開催しているクルド難民女性向けの日本語教室では、昨年より教師を増員して、日本語習得レベル別にグループ指導行っています。

国語の勉強をする小学生

また、昨年からは未就学児から高校生まで個別に学習支援をする児童教室もスタートしました。難民の子どもたちは保育園や幼稚園へ通う機会がほとんどなく、幼児教育や集団での行動を体験せずに小学校へ入学します。入学後、日本ならではの集団教育に戸惑ってしまい、学校の環境へ適応できない子どもたちも多く見られます。また、小・中・高校生の年齢で来日する子どもたちにとっては、言葉の通じない異国での教育内容やスピードについていくことが大変難しく、通学を断念してしまう子どももいます。一方で児童教室を通じて勉強の楽しさを発見し、学校へ通い続けてくれる子どももいます。少しでも多くの子どもたちに勉強や学校の楽しさを知ってもらい、義務教育や高等教育を修了して欲しいという想いから、JAR では引き続き児童教室の運営を行っていく予定です。

これらの活動を継続して行っていくには、私たち JAR の努力はもちろん、ボランティアの方々のお力や、JELA をはじめとした各団体からのご支援など、皆様のサポートなくしては成り立ちません。2013 年からは上記事業の運営へ JELA よりご支援のお声かけをいただいておりまして大変嬉しく思っております。皆様にもぜひ一度、難民の女性たちや子どもたちの笑顔を見に、各教室へ遊びにいらしていただければと思います。

私たちとしても今後より一層力を入れて支援活動に取り組んで参りたいと思います。

第10回「世界の子ども支援チャリティコンサート」のお知らせ

第 10 回世界の子ども支援チャリティコンサートが 5 月から行われます。チャリティコンサートは、世界の支援を必要としている子ども達を助けることを目的としています。チャリティコンサートの収益は、日本福音ルーテル教会（JELC）とJELA とで折半し、JELA の収益は全額「世界の子ども支援」事業に用います。

［開催スケジュール］

■5月２５日（土）午後２時
日本福音ルーテル静岡教会（ひかり礼拝所）
■5月２６日（日）午後１時半
日本福音ルーテル神戸教会
■6月１日（土）午後２時
日本福音ルーテル長野教会
■6月２日（日）午後２時
日本福音ルーテル松本教会
■6月９日（日）午後１時半
日本福音ルーテル保谷教会
■6月２９日（土）午前 10 時
日本福音ルーテル岡崎教会
■6月２９日（土）午後４時
日本福音ルーテル刈谷教会
■6月３０日（日）午後２時
日本福音ルーテル清水教会
■7月７日（日）午後１時半
日本福音ルーテル富士教会
■7月２１日（日）午後１２時半
日本福音ルーテル神水教会

※全て開場は 30 分前で入場は無料（席上献金有）です。

また、８月１日には東日本大震災の被災者慰問として尚絅学院中学・高等学校にてコンサートを開催いたします。皆様のご支援をお願い申し上げます。

［奏者情報］

上野由恵（フルート）　プロフィール

東京芸術大学音楽学部附属音楽高校を経て、同大学をアカンサス音楽賞を得て首席卒業。同大学大学院修士課程修了。

第２回東京音楽コンクール第１位。第 15 回日本木管コンクール第１位、聴衆賞、兵庫県知事賞、朝日新聞社賞。第 1 回北京ニコレ国際フルートコンクールセミファイナリスト。第 76 回日本音楽コンクール第１位、岩谷賞（聴衆賞）、加藤賞、吉田賞、Ｅ・ナカミチ賞。

これまでに、読売日響、都響、新日本フィル、東響、東京フィル、関西フィル、セントラル愛知響、京都市響、芸大フィル、瀬戸フィル、チェコ・フィル室内管、チェコ・フィル六重奏団、ベルリン・フィル首席奏者によるアマルコルド・カルテット・ベルリン等とソリストとして共演。

各地でのソロリサイタルの他、皇居内での御前演奏や首相官邸での日中首脳会談晩餐会で演奏。また、「NHK-FM 名曲リサイタル」、「N 響広場」、「気ままにクラシック」等、多数のラジオやテレビ番組に出演。2010 年から JELA 主催「世界の子ども支援」チャリティー事業にも積極的に参加し、全国でのコンサートを行っている。

2011 年、オクタヴィア・レコードよりデビューＣＤ「オペラ・ファンタジー」、「歌楽ーイサン・ユンフルート作品集」を２枚同時リリース。洗足学園音楽大学講師。

上野由恵公式ホームページ
http://www.mitla.co.jp/uenoyoshie/

新井伴典（ギター）　プロフィール

東京、渋谷生まれ。6 才よりギターを父、和夫に師事。ジュニアギターコンクール・学生ギターコンクール・第 6 回スペインギター音楽コンクールで優勝し、92 年ドイツ国立ケルン音楽大学入学。98 年卒業までにオーストリア国際 RUST2000 ギターコンクール優勝をはじめヨーロッパ各地の主なコンクールで入賞を重ね、2000 年ドイツ国家演奏家資格コース終了。その後ドイツ、オーストリア、チェコ、ベルギーにてリサイタル。現在までに原善伸、佐々木 忠、ゾーラン デュキッチ、トーマス ミュラー＝ペリングに師事。飯森範親の指揮でギターの２大協奏曲「アランフェス協奏曲」と「ある貴神のための幻想曲」を演奏し絶賛される。ソロ CD は「アブリール」「スペインの城」があり、それぞれレコード芸術誌”特選盤”に選出 。また、次世代ギタリストの育成、コンクール上位入賞など後進の指導にも実績を出す。現代ギター学院、上野学園大学講師。

新井伴典公式ホームページ
http://www5.ocn.ne.jp/~tomoarai/

Amazonでのお買い物はJELAから! 約3%が寄付に

お気づきの方もいらっしゃるかと思いますが、昨年末からJELAのホームページ中央に「Amazon」へのリンクが加わりました。（写真参照）

このリンクを経由（クリック）しますとAmazonのホームページへ行きます。

皆様にお願いなのですが、Amazonで買い物をされる際は、ぜひともJELAのホームページ経由でAmazonに行き、お買い物をしていただければ幸いです。皆様がお買い求めになった金額の約３％がJELAへの寄付となる仕組みです。お買い物をされた方の金銭的な負担はございませんのでご安心ください。

皆様のご理解とご協力をいただければ幸いです。

Click!

お知らせ

JELA は一般社団法人として新たなスタートをはじめます。

理事長　中川浩之

日本の全ての社団法人・財団法人は2008 年施行された公益法人制度改革関連３法によって、2013 年 11 月までに改めて認可申請をしなくてはならなくなりました。

JELA ではこれまで 3 年間かけて準備をして来た一般社団法人への移行申請を、内閣府に対して昨年 6 月２９日に行いました。書類提出後、担当官からの細部にわたる質問や修正に応対して結果を待ちましたが、12 月 25 日内閣総理大臣名での許可書が届けられ、2013 年 1 月 4 日に新法人としての登記をする事ができました。

名称は「一般社団法人　日本福音ルーテル社団」となり、事業内容もこれまでの事業をそのままで継続する事が認められ、大きな変化はありません。しかし、財務的にはこれまで適用されていた収益事業での税制上の優遇措置がなくなり、法人税の大幅な負担増が予想され、今後の運営へ及ぼす影響が懸念されます。

義務づけられている「公益目的支出計画」は、計算上 53 年間の実施期間となり、この間は内閣府に計画の実施状況について報告する必要があります。

このような経過を経て 2013 年年頭より新法人として新たな歩みをはじめたわけですが、次のステップとして今後も引き続き、より公益性の高い公益社団法人への移行の可能性を、同種の団体の動向を参考にしつつ検討して参りたいと思います。同時に、一般社団法人としては、これまで以上に会員の増加やファンドレイジングに注力していかなくてはなりません。

これからも JELA の歴史の原点を忘れる事なく、ルーテル教会の宣教共同体の一員として協力しつつ、さらに深く広くキリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えてまいります。皆様のより一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

Eニュースレター会員募集中 英語の勉強にも効果的!

JELAでは不定期にEニュースレターを配信しています。英語のニュースレターになりますが、語学の勉強になるとの声もありますので、日本の支援者の皆様にもご紹介することとなりました。
Ｅニュースレターをご希望の方は、メールの件名に「Ｅニュースレター希望」と明記の上、お名前のみ本文にお書きいただき、jela@jela.or.jpまでメールをご送信くださいますよう、お願いいたします。最新のものを送信させていただきます。

支援者一覧

（2012年9月1日～2013年1月31日）
青山学院短期大学／穐田信子／浅見正一／阿部朋子／阿波田絹子／安藤淑子／池崎幸雄／石崎勝／石澤とし子／石原京子／JELC市ヶ谷教会／伊東虓次郎／稲葉やよい／江藤直純／JELC大分教会／JELC大岡山教会教会学校／JELC大垣教会女性会／大中真理／浦和ﾙｰﾃﾙ学院小中高等学校／ｴﾘｻﾞﾍﾞﾄ音楽大学／柿沢純江／鹿島准看護学院／ｶﾄﾘｯｸ東京大司教区／JELC蒲田教会女性の会／河野悦子／ｶﾝﾊﾞｰﾗﾝﾄﾞ長老ｷﾘｽﾄ教会国立のぞみ教会／北川輝子／京谷信代／九州学院中学校高校・生徒教職員一同／九州学院みどり幼稚園／JELC帯広教会釧路礼拝堂／紅林真由美／倉知延章／JELC小石川教会／JELC甲府教会／小菅可代／小林知子／小松由美／斎藤實／坂根里辺香／埒淑代／佐藤桂子／佐藤玲子／杉浦りえ／鈴木まり子／鈴木やす／須永敏子／聖隷ｸﾘｽﾄﾌｧｰ大学／関口佳子／高尾堯／田坂仁／高田紀子／高舘千枝子／髙橋素子／高橋悠美子／武田光世／竹渕三和子／田中美紗子／龍野摩耶子／立山久美子／JELC玉名教会／玉名ﾙｰﾃﾙ幼稚園／柘植春子／JELC田園調布教会教会学校／田園調布ﾙｰﾃﾙ幼稚園／東葛生と死を考える会／東郷優子／徳善規子／中川浩之／中川陽子／長田ひろみ／那須幸／西川喜久美／西垣親子／西村久仁子／野上きよみ／野田マサ子／芳賀明子／芳賀美江／萩原耕介／橋口保夫・栄子／針田ゆかり／早瀬康平／東牧子／廣田正勝／深川育子／JELC藤が丘教会女性会／藤本紀子／古川文江／JELC保谷教会／保坂和子／益永和代／南節子／宮本裕美／宗方美代子／森保宏／森若奈／森田七三郎／八坂由貴子／山内恵美／山田克子／山本一男／山本孝恵／山本了／米田就子／若原奇美子／渡邉聡／渡辺純子／Hosanna! Lutheran Church　他匿名複数

以上、順不同・敬称略。ご支援ありがとうございます。
匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集余話
近所のトンカツ屋さんが突然店を閉めた。奥さんが大きな手術をするからだという。この老夫婦は、おいしいトンカツで長年地域に貢献された。お二人の残りの人生が豊かなものであってほしい。華道家の楠目ちづさんは著書に、「いろいろな方におせわになって、今の私があります。／小さなことでもいいから誰かの役に立つことをし、社会とつながっていたい。／自分にできること、それが、私には生け花であっただけのことです。」（『花のように生きれば、ひとりも美しい。』いきいき株式会社、2012年）と書いている。周囲に貢献できる小さなこと……。私が意識的にやっているのは、苦しみの中にある知人に励ましの便りを出す中でイエス・キリストを指し示すことである。みなさんは？（M）

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association
一般社団法人日本福音ルーテル社団